

岐阜県博物館友の会の皆様には、長年にわたり、博物館の運営をご支援いただきとともに地域社会との架け橋の役割を担っていただき、心より御礼を申し上げます。



私はこの4月に館長に就任し、郷土の文化拠点である博物館の運営に携わる喜びで意気揚々としておりましたが、新型コロナウイルス感染症拡大阻止のため年度当初より閉館を余儀なくされ、大変残念な思いを致しました。しかし逆境だからこそ、人間の創造力を拡張する文化の大切さを、改めて感じた方も多いのではないのでしょうか。

閉館中は、HP上に「けんぱく おうちミュージアム」を設置し、常設展示物の解説、学芸員お勧めメニューを配信しました。ご自宅での学習に役立ったと嬉しい声もいただき、今後定番としていきます。是非ご覧ください。

私事で恐縮ですが、42才まで日産自動車に勤務し、ゴーン改

岐阜県博物館 館長

川本 敏



革にも初期の3年間身を置いていました。功罪ありますが、企業再生に向けた強烈なリーダーシップと驚愕の手腕に間近で接したことは得難い経験でした。ふるさと岐阜県にUターンした後、県庁で商工業振興、広報、大学運営などに従事し、地域の力が日本の根幹であることを学びました。これらの経験を、博物館運営に生かせればと思います。

岐阜県は今、「清流の国きふづくり」を政策の合言葉に掲げています。森を源とする清流の恩恵で、独自の自然や文化、匠の技が生まれたことを深く理解し、その魅力を磨き上げ誇りをもって全国・世界に発信していく、そして岐阜県ファンを増やして地方創生に繋げるとい志を表しています。

その実効性を高める鍵となるのは、様々な分野で次世代の担い手が育つことです。そのためには、学校教育に加えて地域での社会教育がとて大切で、博物館では、郷土の自然、風土、動植物、歴史、文化、産業など幅広い分野で、源流を紐解く本物の資料や現物に触れることができ、その体験を通して「新たな発見」や「学ぶ楽しさ」

を味わうことができます。まさに、地域の誇りに満ちた「清流の国きふづくり」の推進拠点と言えます。

今年度も、「光秀が駆けぬけた戦国の岐阜」「みんなの恐竜学」など、職員が知恵を絞り工夫を凝らした特別企画展を準備しています。また、岐阜大学や県図書館における移動展、大型商業施設における出張展など、全県展開事業にも積極的に取り組んでいきます。

博物館には今後、地域の社会教育拠点としての役割をベースに、未来に向けた持続可能社会への貢献、観光や地域づくりとの連携などが求められていくと思われま。

当館は来年度、開館45周年という節目の年を迎えます。新規のお客様の発掘をいかに進めるか、そのためにコンテンツの魅力度をいかに高めていくかという課題に取り組む中で、博物館に求められる新たなテーマに対しても、果敢にチャレンジしたいと考えます。

また、地域に愛される博物館であるためにはホスピタリティが何より重要です。郷土の魅力を分かりやすく、そして想いを込めてお伝えするため、学芸員や解説員は日々腕を磨いています。そこにも是非ご注目ください。

友の会の皆様には、博物館が県民の皆様により一層ご活用いただける様に、今後忌憚のないご意見を頂戴できればと存じます。

「みんなの恐竜学」

岐阜県博物館 学芸部 高津 翔平

長年、恐竜の化石は見つからないと言われてきた日本ですが、1978年に岩手県で見つかったモシリュウをきっかけに、今や日本はアジア有数の恐竜産出国の1つとなっています。岐阜県においても、1987年のヒブシロフォドン類の歯の発見をきっかけに、高山市荘川町から多数の恐竜の歯の化石が見つかり、また大野郡白川村大川地域では日本でも最大級の恐竜足跡化石露頭が見つかりました。日本産の恐竜化石の新種発見・報告が続く今日、子供から大人まで幅広い世代に親しまれる「恐竜-Dinosaur-」は、メディアや教育を通して今やなくてはならない存在と言えます。

恐竜は中生代の三畳紀後期（約2億3,000万年前）から白亜紀末期（約6,600万年前）にかけて陸上に生息していた大型の爬虫類です。そのため、空飛ぶ爬虫類として知られる翼竜類や、水中で暮らしていた首長竜類や魚竜類、モササウルス類などは恐竜には含まれません。また今日では、鳥類が恐竜の中でも獣脚類と呼ばれるグループから進化したことが明らかとなっており、約6,600万年前に絶滅したと考えられていた恐竜は、今もおおむね鳥に姿を変え生き残っていると解釈できます。

1824年、自然史学者のウィリアム・バックランド(William Buckland)が記載したメガロサウルスは、世界で初めて命名された恐竜となりましたが、「恐竜類:Dinosauria」と呼ばれる分類群が誕生したのはそれより後の1842年に解剖学者のリチャード・オーウェ

ンによるものです。メガロサウルスの命名から200年近くが経とうとしているなか、その研究史を振り返ると、最古級の鳥類化石「始祖鳥」の発見、マーシュとコープの恐竜化石発掘競争、*T. rex*の命名、アンドリュースによるゴビ砂漠探検調査、新たな恐竜研究の幕開けとなる「恐竜ルネッサンス」、隕石衝突による恐竜絶滅説や羽毛恐竜の発見にいたるまで、恐竜に対する多くの知見が蓄積・更新されてきたことが分かります。今まさに恐竜学は大きな変革を迎えており、恐竜に対する基礎を一から学び、これまでと、そしてこれからの恐竜学について考える良い機会と言えます。

今回の展示では、実物・複製を含めた恐竜全身骨格・頭骨を多数展示します。また、タイ王国で見つかった恐竜足跡化石産地のうち、最も有名な産地フアイ・ダン・クン(Huai Dan chun)のVR展示とその研究成果をもとに製作した恐竜復元画(画:小田 隆)を日本初公開します。さらに岡山理科大学協力のもと、モンゴルの恐竜化石産地や恐竜足跡化石足跡産地のパネル展示も行います。加えて、現在岐阜県博物館が実施している県内の恐竜化石調査の最新報告や荘川産恐竜化石を一挙公開します。本特別展を通して、恐竜がより一層身近な存在となり、自然科学に触れる1つのきっかけとなれば幸いです。

※新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、本展示は同年冬季に延期及び規模縮小し特別企画展として実施します。今後の詳細は、当館HP等でお知らせします。



▲復元画「オルニトミモサウルス類の群れ」

(画:小田 隆)

「ジオランドぎふ」

岐阜県博物館 学芸部 熊澤 忍

みなさんはジオパークという言葉を知っていますか。ジオパークとは、大地を意味するジオと公園を意味するパークを組み合わせた言葉で、「大地の公園」を意味し、価値のある地形や景観といった大地(＝ジオ)を守りながら教育や観光地などに活用するものです。では、「ジオランドぎふ」は何でしょうか。きっと「岐阜県のジオに関するものだろうか」と予想はつくかと思いますが、「ジオランドぎふ」は、2014年に岐阜大学の小井土由光名誉教授(岐阜県地質調査会代表)によってウェブ上に公開された岐阜県の地質図です。地質図とは、その土地を作る地層や岩石にはどういった種類があるのか、いつできたものなのかなどを地図上に表したのですが、「ジオランドぎふ」では、地質図の他にも温泉地や景勝地、活断層などの地質現象を幅広く解説してあります。とりわけ、昨今頻発する風水害や地震などの災害において、過去にどういった場所で起きているのかを知ることは、将来へ向けての備えにつながるのではないのでしょうか。

そんな「ジオランドぎふ」が今年度の4月から岐阜県博物館に移管されました。「ジオランドぎふ」をぜひご覧ください。きっと新たな発見があるかと思いますが、また、見学コースも載っています。気になった場所には足を運んで頂き、ご自身の目で確認して頂きたいと思います。



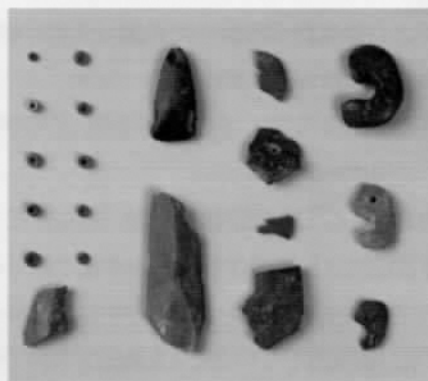
「神坂峠のお祭り道具」

岐阜県博物館 学芸部 近藤 大典

神坂峠は、ほぼ南北に連なる恵那山と神坂山の間の鞍部にある峠です。現在、岐阜県と長野県の県境が走っていますが、古代以前においては美濃国と信濃国との国境でもありました。古代に整備された東山道は、この峠を越えたと考えられています。また、日本武尊の伝承などにも出てくる「信濃坂」(『日本書紀』)は、この神坂峠を指していると考えられています。このように美濃と信濃、都と東国を結ぶ重要な交通路でしたが、最高所が標高1600m近いなど東山道随一の難所でもありました。例えば、平安時代のことで、峠の東西にある坂本駅(美濃国)、阿智駅(信濃国)の経営に苦慮した様子が記録に残っています。

このように険しい峠を無事通れるよう願う気持ちをあらわす遺物が残されています。古くから地表面で石製品や土器類が採集され、昭和40年代に長野県側で行われた発掘調査では、石製模造品や勾玉・管玉、古墳時代の5世紀末から平安時代にかけての土器など、千点を超える遺物が出土しています。

当館にも神坂峠で採集された、古墳時代の勾玉や管玉、石斧や剣を模した石製模造品が収蔵されており、人文展示室において紹介しています。峠を越える古代の人々の願いを想いつつ、ぜひご覧いただければと思います。



▲神坂峠出土品(当館蔵)

資料紹介

「平岩親吉書状」(当館蔵)

岐阜県博物館 学芸部 安藤 均



▲浅野長政宛平岩親吉書状

この書状は、昨年度当館が購入した所蔵資料です。

平岩親吉(1542~1611)は徳川家の家臣で、幼い頃から家康の下で仕え、甲斐の郡代として国内経営を行った後家康から厩橋城主に補せられました。その親吉から豊臣五奉行の一人、浅野長政に宛てられた書状です。年号の記載はありませんが、関ヶ原の合戦後の慶長5年(1600)9月27日に出されたものと考えられます。

内容は以下の通り多岐にわたっています。

- (1) 長政の長男幸長が岐阜城の戦いや河渡の戦い、さらに関ヶ原の戦いで戦功を重ねたこと
- (2) 親吉自身は真田討伐のため徳川秀忠に供奉した後家康の指示で関東に帰陣していたこと
- (3) 上杉景勝が布陣している白川(河)表及び越後筋には特に別条がないこと
- (4) 関東にいる三男の長重には変わりがないこと

この書状には広範囲の地域の状況が記されています。「天下分け目の関ヶ原」と言われますがそれに前後・並行して各地で戦いが頻発していたことを物語る資料です。

今秋開催予定の特別展「光秀が駆けぬけた戦国の岐阜」でもこちらを展示予定です。その他戦国の岐阜ゆかりの武将たちの資料も多く登場予定です。皆様のご来館をお待ちしております。

マイミュージアムギャラリー 第3回展示

「生命のれきし40億年・木彫り恐竜骨格模型展」

令和2年7月11日(土)~9月6日(日)

岐阜県博物館 学芸部 加賀 隆志

令和2年度の第3回目は、渡辺基文さん(瑞浪市在住)と田淵良二さんによる「生命のれきし40億年・木彫り恐竜骨格模型展」を開催します。

渡辺さんは、化石産地の瑞浪市で育ち9歳から遊びとして化石採集を始めました。国内においては、岩手県や高知県でも化石の採集をしています。その後は、書籍や博物館の見学において化石に関する専門的な知識を深め、アメリカやヨーロッパの諸国においても生命の系統樹や進化にそった化石の収集も手掛けています。

今回の展示では、渡辺さんが64年もの歳月をかけて収集した約5,000点以上のコレクションの中から先カンブリア時代から新生代に及ぶ代表的な化石約250点を紹介します。

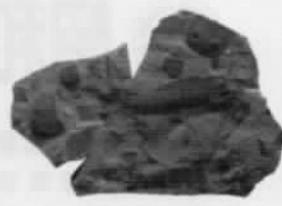
また、田淵さんは、木彫りで恐竜の骨格模型を制作しています。この精巧さは高い評価を受け、全国各地で展覧会が開催されました。今回の展示では、これまでに制作した恐竜をはじめとする骨格模型を約30点紹介します。



▲ティラノサウルスの骨格模型



▲デスモスチルスの歯の化石



▲ウミサソリの化石

岐阜県博物館からのお知らせ

令和2年度がスタートしました。

10名の新しい職員を迎えました。県民の皆様が、岐阜県の自然や歴史・文化に親しみ、誇りをもつことができるように頑張りますので、よろしくお願いいたします。



川本敏館長をはじめ10名の新しい職員を迎えました。

博物館では、ホームページをはじめ、フェイスブック、ツイッターで催し物の案内や、情報発信を行っています。

また、新型コロナウイルス感染拡大の影響による各種イベントの自粛が広がっている中、県民の皆さまにご自宅での時間を楽しんでもらえるよう、当館の常設展示の紹介や旬な情報を発信する「けんぱく おうちミュージアム」もオープンしました。

パソコン、タブレット、スマートフォンなどから見学していただくことができますので、ぜひご覧ください。

アクセス方法

ホームページアドレス

<http://www.gifu-kenpaku.jp/>

岐阜県博物館 で検索か下のQRコードを読み取ってアクセスしてください。



岐阜県博物館のHP



岐阜県博物館の
ツイッター

友の会事務局からのお知らせ

今年度の岐阜県博物館年間スケジュールについて

4月4日(土)から5月18日(月)まで、新型コロナウイルス感染拡大防止のため休館となりました。博物館が当初予定していた展覧会やイベントもいくつか中止・変更となっています。今後のスケジュールについては、博物館HPやツイッター等で随時ご確認していただくか、または、お電話(0575-28-3111)でお問い合わせください。